

韓国古文書におけるサインと身分・性別

Signatures of Korean Old Documents by Status and Gender
PARK Jun-ho (Translate : INADA Natsuko)

朴 竣 鎬 (訳：稲田奈津子)

はじめに

朝鮮時代の文書に用いられた信頼のための標識(信標)の方式は、おおよそ署名・花押・手寸・手掌・図書・印章に分けることができる。

(1)「署名」は、名の文字を変形させて作った信標方式である。相手を礼遇する意味があるので、一般的に目下の人が目上の人に対して使用し、「着名」「着銜」などと同義語である。(2)「花押」は、名とは異なる別の文字を変形させて作った信標方式である。相手を礼遇する意味を持たないため、一般的に目上の人が目下の人に対して使用し、「着押」「署」(署押)「押字」「手決」「手例」などと同義語である。(3)「手寸」は、食指などの手指を紙にあて、関節に点を打った後、輪郭線を描いて作った信標方式である。(4)「手掌」は、手のひらを紙にあて、全体の輪郭線を描いて作った信標方式である。(5)「図書(図署)」は私印のことで、姓氏などを木や石に刻み、印章のように捺した信標方式であるが、時には描く場合もあった。(6)公的な「印章」としては、御宝や

官印が主に使用された。甲午更張(一八九四年から翌年にかけて、開化派により推進された日本式の近代化改革：訳者註)以後は、私印による印章文化が急速に拡散した。

以上の六つの信標方式は、身分と性別により区別されたものと考えられてきた。両班は署名と花押を、平民と賤民は手寸と手掌を、両班婦人は図書を使用したというのである。しかし資料を身分ごとに整理してみると、全般的な傾向はあるにしても、必ずしも身分と性別による原則があったわけではない。あるいはその傾向というものも、残存資料数に起因する差異であるのかも知れない。平民と賤民の文書に比べ両班の文書は、圧倒的に多数が残されているためである。

本稿では身分と性別を基準として、様々な信標方式の類型を時代別に例示し、文献記録では確認できない、いくつかの変化過程について、検討してみるつもりである。この作業を通して、伝統時代から現代へと続く信標方式の変化の側面を明らかにしたいと思う。

また、多少無理があるものの、上記で整理した六つの信標方式を包括

する概念として、「サイン (signature)」という用語を借用したいと思う。いまだ適当な用語を定められないがための苦肉の策であることを、あらかじめお断りしておく。

1 国王と王室のサイン

国王は最上位の身分であるが、署名と花押を用いることは、一般の両班官僚層と変わらない。次の〈図1〉は、これまでに確認した歴代朝鮮国王の署名である。すべて姓を除いた名の文字の字形を変化させて署名

を作っている。

しかし国王の花押は特別であった。国王は最高位にあったので、登極後には主に花押を使用したためである。一般的に、国王として登極すると、すぐに議政府・六曹・弘文館・芸文館に所属する高位官僚たちが集まり、国王の花押である「御押」を議論し定めた。この過程を経て、孝宗は「正」字、顯宗は「立」字、肅宗は「守」字を御押として定めた。⁽¹⁾ 肅宗の御押は未発見だが、孝宗と顯宗の御押は〈図2〉のとおりである。孝宗の御押は「正」字の隸書体で作られ、顯宗の御押は「立」字の篆書



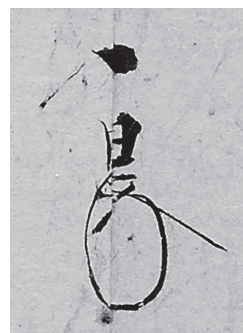
② 睿宗 (李暁, 1441 - 1469)
変形字: 暁



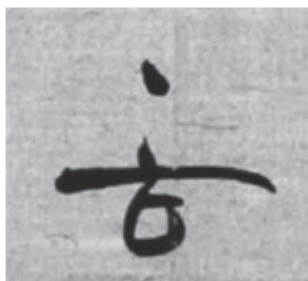
① 太宗 (李芳遠, 1367 - 1422)
変形字: 芳遠



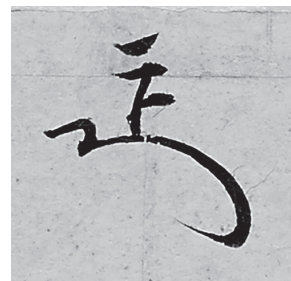
④ 顯宗 (李欄, 1641 - 1674)
変形字: 欄



③ 孝宗 (李淐, 1619 - 1659)
変形字: 淐



⑥ 正祖 (李祘, 1752 - 1800)
変形字: 祘



⑤ 肅宗 (李焞, 1661 - 1720)
変形字: 焞



⑧ 純宗 (李坰, 874 - 1926)
変形字: 坰



⑦ 高宗 (李熙, 1852 - 1919)
変形字: 熙

図1 朝鮮国王の署名



② 顯宗 (李瑬, 1641 - 1674)
変形字: 立



① 孝宗 (李淐, 1619 - 1659)
変形字: 正

図2 孝宗と顯宗の御押



② 思悼世子 (莊祖, 李瑱, 1735 - 1762)
変形字: 達



① 英祖 (李愼, 1694 - 1776)
変形字: 通

図3 英祖と思悼世子(莊祖)の御押

体で作られた。

〈花押は、故事や經典などを参考に、変形させる文字を選定した。以下は、英祖が息子の思悼世子の花押を作って与えた際に、その意味を記録として残したものである。

上(英祖)がおっしゃるには、「世子(思悼世子)の花押を『達』字に定めたのは、『通達』の意味をとったもので、頻繁に使われる文字ではあるが、あえて諱まずともよい」とされた。…(中略)…上に『達』字で花押され、その下に書かれたことには、「私(英祖)の花押は『通』字としたが、これは以前に下賜されたものである。なんじ(思悼世子)を励まし勉めさせ、戒め正すために、花押を直

接書いて与えるのであり、この花押は臣下たちが作り献上する花押とは比較できないほど価値のあるものである」。またその左側へ書かれたことには、「孔子は武王と周公を『達孝』と褒めたたえられ、『人の志をよく受け継ぎ、人のことをよく叙述した』とおっしゃったので、『よく受け継ぎ、よく叙述すること』が孝の中でも最も重要なのである。(下略)」⁽²⁾

英祖は「通」字で作った御押を下賜され、息子には「達」字の御押を作って与えた。英祖と思悼世子の場合は、大臣たちが花押を定めて捧げる手順をふまなかったようである。思悼世子の「達」字の御押には、「通達」と「達孝」の意味が付与されていた。⁽³⁾

〈図3〉は、英祖と思悼世子の御押である。前掲の『英祖実録』の記録のように、英祖の御押は「通」字の草書体で作られ、思悼世子の御押は「達」字の草書体で作られている。

〈図4〉は、変形させた文字を推定できる御押である。〈図4-①〉は世祖の御押で、明朝体様式の典型的な形態である。¹⁾変形字は「極」字と見られる。〈図4-②〉は成宗の御押で、やはり典型的な明朝体様式である。変形字は「慶」字と見られる。〈図4-③〉は最近あらたに見出



②成宗(李裊, 1469-1494) 変形字:慶カ



①世祖(李瑈, 1417-1468) 変形字:極カ



③光海君(李瑱, 1575-1641) 変形字:誠

図4 変形させた文字を推定できる御押

した光海君の御押である。一六二二年に朝鮮国王が明の礼部に送った平咨(二品以上の同等の官庁間で用いられる文書形式で、朝鮮と明との外交文書にも用いられた²⁾訳者註)にあるものである。『洪武礼制』によれば、平咨には花押をするよう規定されている。上段の長い画は、十五世紀に流行した明朝体花押の様式的特徴の影響である。しかし全般的には、署名と花押の形態的錯綜が徐々に現れている。この御押は文字を読むのが相対的に易しく、「誠」字を変形したものである。「誠」字は、おそらく「誠敬」から意をとったのであろう。「誠敬」は儒学の重要概念であり、常に精誠を尽くし恭敬であることを意味する。

〈図5〉は、現在までに確認できた御押の中で、変形させた文字がわからないものである。〈図5-①〉は太祖の御押で、明朝体様式である。〈図5-②〉と〈図5-③〉は正祖と純祖の御押で、形態がかなり似ていて混同するほどである。父王の志を継承するという意味で似せて作ったものと推定され、大きな意味で孝と関連するようである。〈図5-④〉と〈図5-⑤〉の高宗と純宗の御押も、似たような様相を見せている。

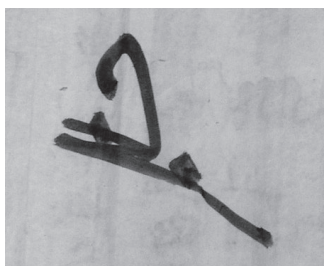
国王の手寸と手掌は未確認であるが、おそらく使用されなかったであろう。

王室宗親の女性は、サインの中でも図書だけを使用した。特に王室と王の親戚(宗親)の女性の図書は朱印なのが特徴である。朱印の図書は、公主や内命婦の嬪(国王の後宮、正一品)等、宗親の妻として府夫人(大君の妻、正一品)や郡夫人(君の妻、正・従一品)等が使用した。同じ正一品の品階であっても、文武官の妻である貞敬夫人は黒印の図書を使用した。彼らが使用した朱印図書は、品階により大きさが区別された。二品以上の妻は方一寸七分、六品以上の妻は方一寸四分、七品以下の妻は方一寸と規定された。³⁾

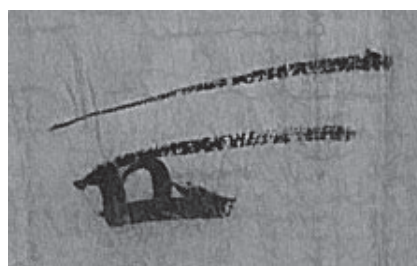
〈図6〉は、公主・府夫人・嬪・昭容の身分で、朱印図書を捺した事例である。図書の大きさが各々異なるのは、『経国大典』が本格的に施



③純祖(李琮, 1790-1834)
変形字: 未詳



②正祖(李祘, 1752-1800)
変形字: 未詳



①太祖(李成桂, 1335-1408)
変形字: 未詳

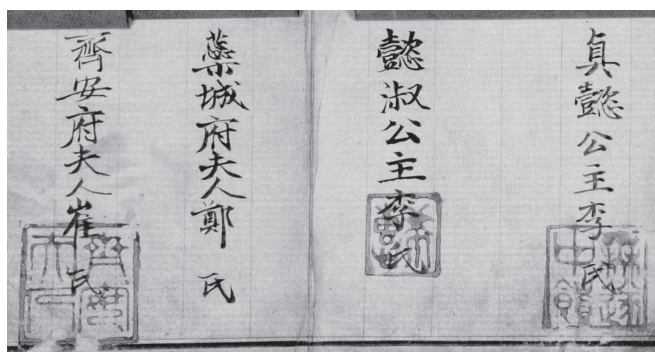


⑤純宗(李炤, 1874-1926)
変形字: 未詳

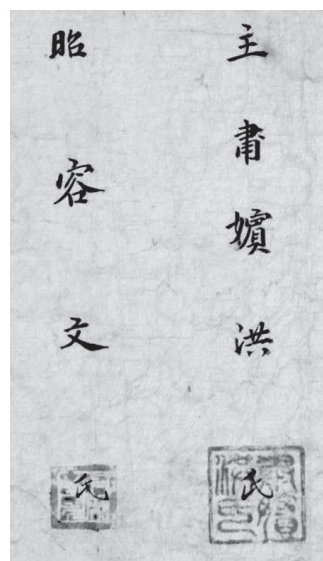


④高宗(李熙, 1852-1919)
変形字: 未詳

図5 変形させた文字がわからない御押



②貞懿公主李氏, 懿淑公主李氏, 齊安府夫人崔氏の朱印図書(1464)



①肅嬪洪氏と昭容文氏の朱印図書(1468)

図6 朱印の図書

行される前に作成された文書であるためである。

3 両班のサイン

以下は、十六世紀に偽造文書のために起きた訴訟事件の顛末を記録した、官庁文書の一部である。

今、訴訟をするに際し、俅音（約束をする文書）と所志（請願書）にある署名が各々異なるのは、私の名を、父がはじめは「濬哲文明」の「濬」字で名付けられましたが、去る戊辰年に父が退溪先生にお伺いし、宋朝の名臣であった張浚の「浚」字に名を改められました。署名はその名の文字の字画によって作るものであるため、前後の署名が合わないものであり：（下略）⁽⁶⁾

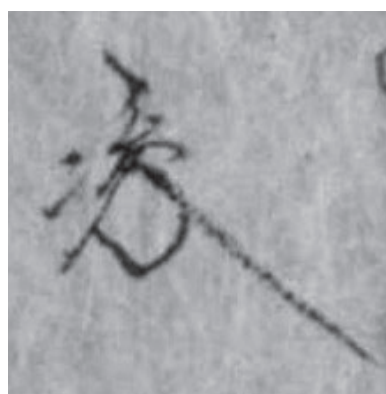
訴訟の過程で、李浚（一五四〇—一六二三）という人物は、文書の署名が変わったことについての質疑に答えねばならなかったようだ。そしてその理由を、李濬から李浚に改名したためであるとしている。改名により名の文字が変わったので、その字画を変形させて作る署名も形態が変わるのは当然だという論理である。

〈図7〉は、李濬から李浚に改名したことで変わった実際の署名である。李濬である時は「濬」字を変形させて署名を作っており、李浚に改名した後は「浚」字を変形させて署名を作っている。しかし、このように署名が変わるのは異例なことで、一般的には一度作られた署名や花押は変わらず、生涯使用された。

〈図8〉は、十五世紀から十八世紀までの両班たちの署名である。〈図8-①〉は申叔舟の署名で、名の文字である「叔舟」字を変形させて作っている。〈図8-②〉は李有中の署名で、名の文字である「有中」字を変形させて作っている。十六世紀頃から署名と花押の形態が互いに錯綜しはじめる。李有中の署名で中央に長く引かれた画は、明朝体花押の影響である。それ以前の署名が名の文字の変形にほぼ忠実であったの



①改名前の李濬の署名 変形字：濬



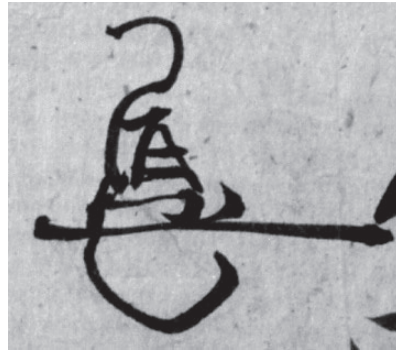
②改名後の李浚の署名 変形字：浚

図7 改名により形態が変わった署名

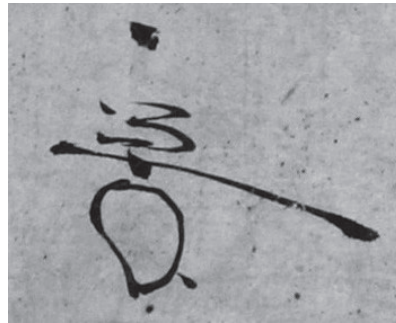
に対し、これ以降は花押の形態的特徴が署名に現れてくる。そのために署名は、さらに抽象化した文字の形態に変化した。〈図8-③〉は権尚夏の署名で、中央の長い画が特徴的であり、以前よりも名の文字がさらに変形している。文書の内容から誰の署名かがわかるため、これを権尚夏の署名と判読することができるのであって、署名だけで誰のものか見分けるのは難しい。〈図8-④〉は金鍾秀の署名で、名の文字の中の



④金鍾秀(1728-1799) 変形字：秀



②李有中(1544-1602) 変形字：有中



③樞尚夏(1641-1721) 変形字：尚夏



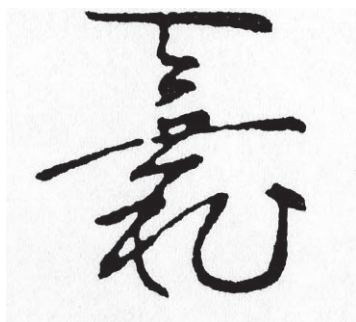
①申叔舟(1417-1475)
変形字：叔舟

図8 両班の署名

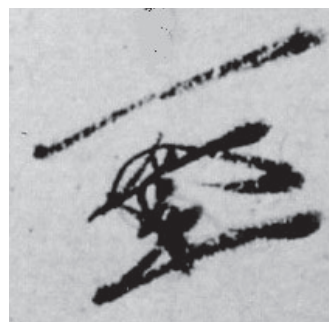
「秀」字だけを変形させて作っている。朝鮮後期からは、名の一字だけを變形させる事例が増える。おそらくは族譜が流行することで、親戚たちが共通して使う行列字では区別できないため、それが除外されたのではないかと思われる。しかし、一字だけを変形させることで形態は非常に単純化し、どこか硬直して図案化された印象が拭えない。十五世紀の署名と比較すると、多分に様式の退歩を見ることが出来る。

〈図9〉は、十五世紀から十八世紀までの両班たちの花押である。〈図9-①〉は金孝盧の花押で、變形させた文字はわからない。上下に長く引かれた画と、その間を複雑に埋める、典型的な明朝体様式の花押である。〈図9-②〉は金富弼の花押で、「無私」字を變形させて作っている。「無私」は「至公無私」から借用したものと見られ、儒学的重要概念のひとつである。上段に長く引かれた画は、明朝体様式の影響を受けたものである。〈図9-③〉は柳敬時の花押で、上段に明朝体様式の影響が残っているが、ひどく抽象化された形態から變形された文字を推定するのは難しい。〈図9-④〉は趙翼永の花押である。朝鮮末期には明朝体様式を脱した新しい形態の花押が流行した。一般的に「一心」字の字形を變形させて花押を作ったが、これを特に「一心決」と言った。当時はすでに署名と花押が形態的にも概念的にも入り交じり、署名を名の文字とは無関係の「一心」字で作る場合が多かった。全体的に形態が単純化することで、別人と区別する機能が大幅に失われるなど、様式的に退歩した。

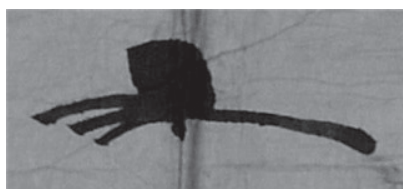
〈図10〉は、両班男性が手寸をした珍しい事例である。〈図10-①〉は直長同正の官職にあった権明利の左寸である。〈図10-②〉は黄中善の左寸で、姓名の上には病人であると書かれており、彼が字を書けない状況にあったことを間接的に推測することができる。両班は読み書きができたため、主に署名と花押をしたが、様々な特殊な状況においては手寸をする場合もあった。一方で、両班男性が手掌をする事例は無いよう



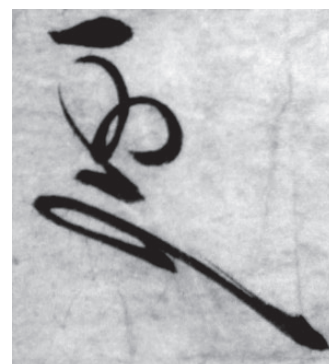
②金富弼 (1516 - 1577) 変形字: 無私



①金孝盧 (1454 - 1534) 変形字: 未詳

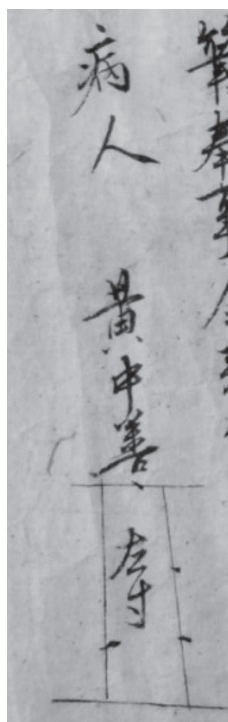


④趙翼永 (1781 - ?) 変形字: 未詳

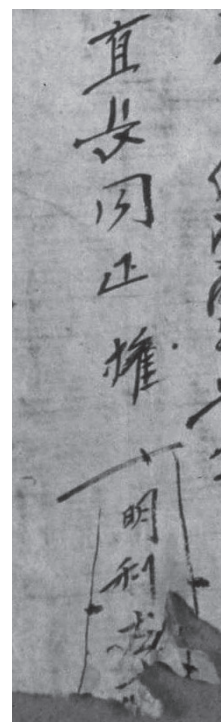


③柳敬時 (1666 - 1737) 変形字: 未詳

図9 両班の花押

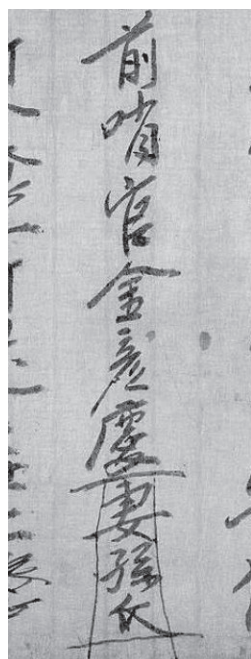


②黄中善の左寸 (1594)

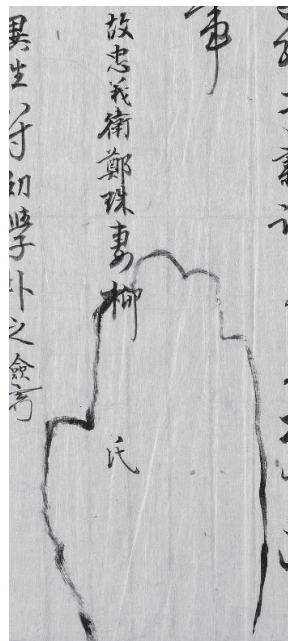


①権明利の左寸 (1436 - 1443)

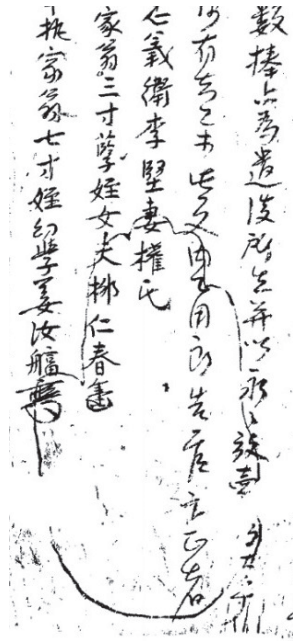
図10 両班の手寸



③前哨官金彦慶妻、
孫氏の手寸(1631)



②故忠義衛鄭珠妻、
柳氏の右掌(1699)



①故忠義衛李堅妻、
權氏の右掌(1595)

図 11 両班女性の手寸と手掌

ある。

〈図11〉は、両班女性の手掌と手寸の事例である。〈図11-①〉と〈図11-②〉は右掌で、指を閉じた手の形をそのまま描いている。男左女右との認識があり、女性は右掌が多く描かれた。〈図11-③〉は両班女性の手寸で、左右はわからない。しかし両班女性は手掌や手寸よりも図書を好んだようである。

朝鮮時代の文書に捺された印章は、これを使用する主体によって、御宝・官印・図書に区分することができる。⁽⁸⁾ 御宝は国王が、官印は官府で、図書は私人が使用する印章である。そこで「印章を捺す」と表現するとき、御宝は「安宝」と、官印は「踏印」と、図書は「着図書」と記した。両班の図書は、婦人たちが使用したものが大部分である。両班男性の場合、日本に送る書契に捺す朱印の図書を除くと、事例は多くない。

〈図12〉は朝鮮時代の図書である。〈図12-①〉は女性である原州金氏の図書であるが、正一品の貞敬夫人であるにも拘わらず、文武官の妻であるために黒印の図書を捺している。印文は「原州金氏之印」で、原州は彼女の本貫である。女性の図書は十四世紀の文書にも確認できるため、それ以前から使用されたものと考えられる。当時、図書には姓氏だけを記するのが一般的であった。しかし同郷内に同じ姓氏を使う人が多く、様々な問題が発生したことから、十五世紀末には混乱防止のために夫の名をあわせて記すようにさせた。

婦人が文書を作成するときには、いつも印章を捺しますが、印章は偽造する人がかなり多いです。印章には「某郷某氏」と記すため、姓が同じ人が借りて使うので、請うことには「某妻某氏」と記すようにしてください。⁽⁹⁾

〈図12-②〉は、「夫の姓名＋妻＋姓氏」を記した黒印の図書であ



②「閔晦妻趙氏」(1656)



①「原州金氏之印」(1464)



③「晋山柳氏」(1615)

図12 朝鮮時代の図書

る。印文は「閔晦妻趙氏」で、閔晦は趙氏の夫の姓名である。しかし、十五世紀末以降のすべての図書に夫の姓名が記されたわけではない。これに先行する時期にも夫の姓名を記した事例があり、またこれ以降でも女性単独で姓氏だけを記した事例もある。(図12-③)の印文は「晋山柳氏」で、朱印の図書である。朝鮮の礼曹参議であった柳潤(一五五四―一六二一)が、日本の対馬州太守に送った書契に捺したもので、晋州は柳潤の本貫である。実はこの図書は、捺されたものではなく描かれたものである。いずれにせよ正式な外交文書に、私印の意味を包含する図

書を捺した(描いた)のは異例である。

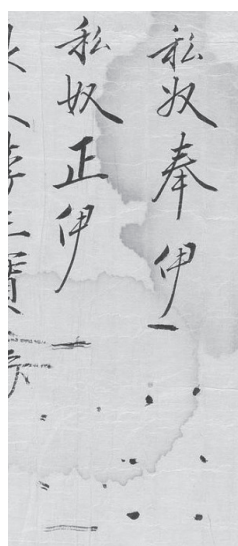
4 平民と賤民のサイン

サインは、文字を読み書きする能力と密接な関係にある。したがって賤民であっても、筆で文字が書ければ、文書に署名することができた。平民と賤民が手寸や手掌を多用したのは事実だが、それが絶対的なものではなかった。平民と賤民は教育の機会に恵まれなかったため、文字をきちんと学ぶことができず、そのために筆で署名するのが容易ではなかったのである。

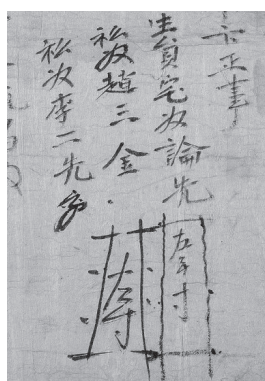
〈図13〉は賤民が署名をした事例である。〈図13-①〉は奴每邑山の署名である。「毎邑山」字は本文の書体とは異筆で、本人が直接、筆で名を書いて署名している。〈図13-②〉は奴洪守の署名で、名の文字の中から「守」字を変形させて作っている。〈図13-③〉は「一心」字を変形させて作った、奴命彦の署名である。名の文字とは無関係な署名で、典型的な朝鮮末期の「一心決」形態をとっている。

〈図14-①〉は、一通の文書に奴論先と奴趙三金の左寸、そして奴李二先の署名が共にある事例である。李二先の署名は、名の文字の「二先」字を変形させたものであるが、抽象化がかなり進行しており、正確に読むのは難しい。ひとつの文書内に賤民の署名と手寸とが共存するが、これはサインが身分とは無関係であることを意味する。〈図14-②〉は奴奉伊と奴正伊の手寸である。一般的な手寸とは異なり、手指の上下位置に線を引き、関節は点だけ打って表現している。手寸を描く時は、このようにまず点を打って位置を標示し、左右に線を引いて仕上げたものと推定される。

〈図15〉は賤民の手寸である。手寸は、手指の関節の大きさが人によって異なるため、その特徴を信標の手段として利用したものである。字を学ぶことができなかった人々が、普遍的に使用したサインであった



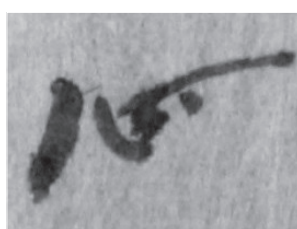
②私奉伊と私正伊の手寸 (1712)



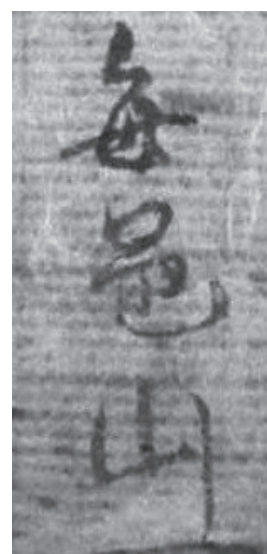
①私奴論先と私奴趙三金の左寸, 私奴李二先の署名 (1745)



②私奴守 (1623) 変形字: 守



③私命夏 (1896) 変形字: 一心



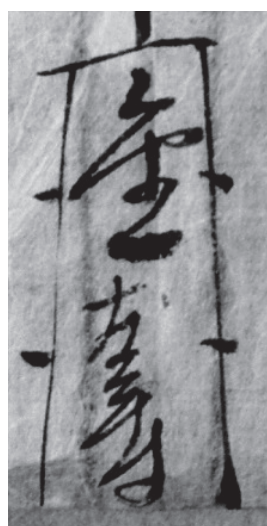
①私奴每邑山 (1519) 変形字: 每邑山

図14 手寸と署名の事例

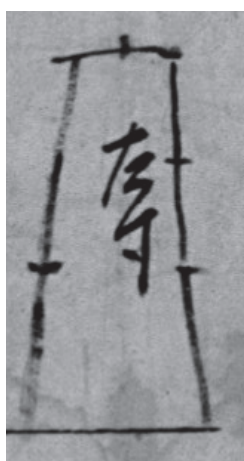
図13 賤民の署名



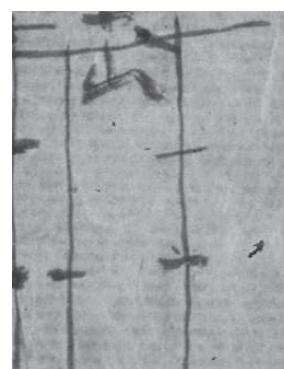
④私奴軒伊 (1877)



③私奴於隱金 (1714)



②私奴丁民 (1672)



①私奴蔡山 (1548)

図15 賤民の手寸

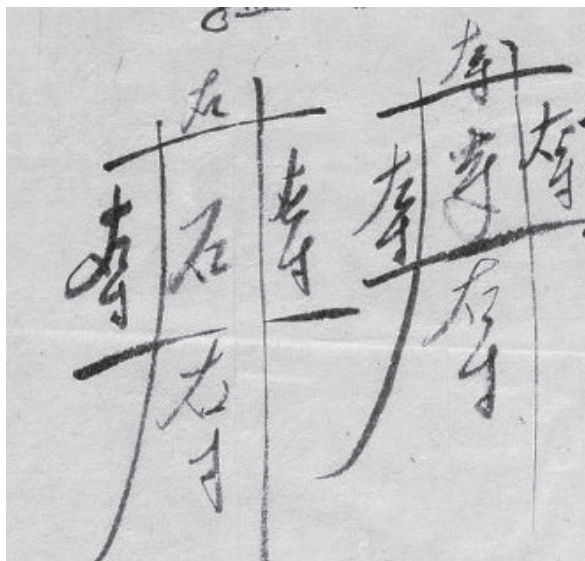
た。手のひら全体を描いたり、手に墨を塗って捺したりするよりも、手指を紙に当てて描くのが、もつとも便利な方法だったのであろう。〈図15-①②③〉は奴蔡山・奴丁民・奴於隱金の手寸である。いずれも手指の関節を標示しているが、時期による特別な様式的変化までは確認することができない。〈図15-④〉は朝鮮後期に集中的にあらわれる手寸の形態である。手指の形態というよりは、「井」字に似た模様を抽象的に描いている。手寸の形態的概念と特徴が崩れて、図式化がかなり進展している。

〈図16-①〉が手寸の本来の形態的特徴をよく表しているのに対し、〈図16-②〉は図式化された手寸の形態を示している。手指やその関節の形態は全く見てとることができず、「井」字を書き、その後左右に「右寸」や「左寸」とあちこちに書いている。どうしてこのような形態が突然流行したのであろうか。もちろんサインは信標の手段であるため、売買文書に多く使用された。売買文書に図式化された手寸をしたならば、売買の信頼は失われざるを得なかったはずである。言い換えれば、社会システムが弛緩しなければ登場することのない状況と言うことができる。

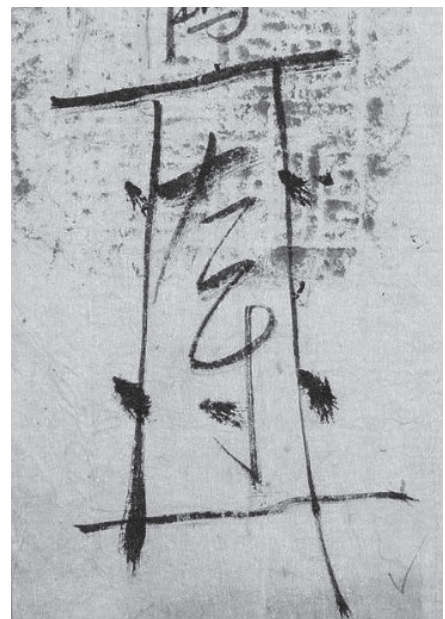
〈図17〉は賤民男性の手掌である。サインの頻度から見ると、事例は少ないと言える。手掌も手寸と同じく、男性は左掌を、女性は右掌を多く使用した。朝鮮前期の手掌が手指を閉じて全体的な輪郭線を描いたのに対し、朝鮮後期の手掌は手指を開いた形態が多い。いくらか小さな筆で描いたとしても、手指を広げた状態で手指の間が狭く、輪郭線を描くのは無理である。よって手指を開いた手掌は、図式化された手寸と同じ脈絡で見ることができる。

〈図18-①②③〉は賤民女性の手寸である。全般的な形態は男性の手寸と大同小異であるが、相対的に女性は右寸が多い。〈図18-④〉は図式化された手寸の形態を見せる。「井」字の下に空間に「右」字を書くもので、やはり朝鮮末期の特徴である。

〈図19〉は賤民女性の手掌である。賤民男性の手掌に似て、大部分は

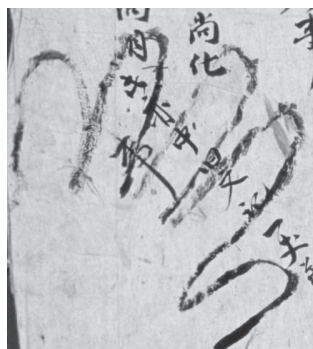


② 奴小順玉と奴良釧の手寸 (1899)

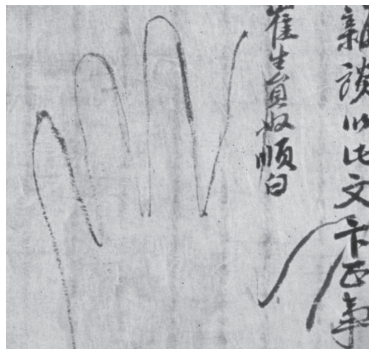


① 奴貴鶴の手寸 (1716)

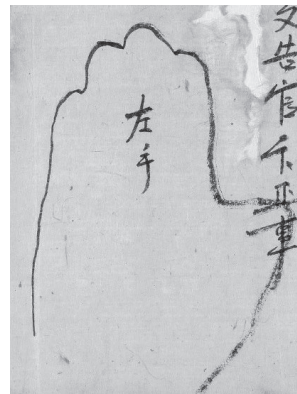
図16 手寸形態の図式化



③奴尚化(1878)

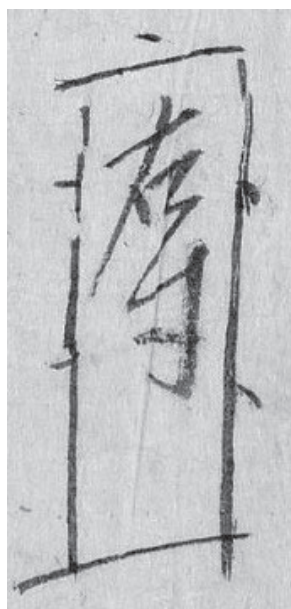


②奴順白(1809)



①奴次先(1763)

図 17 平民と賤民の手掌



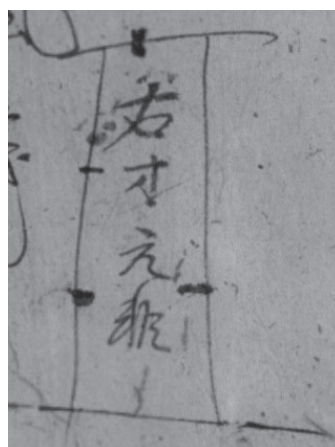
③婢正月(1716)



①古温非(1559)

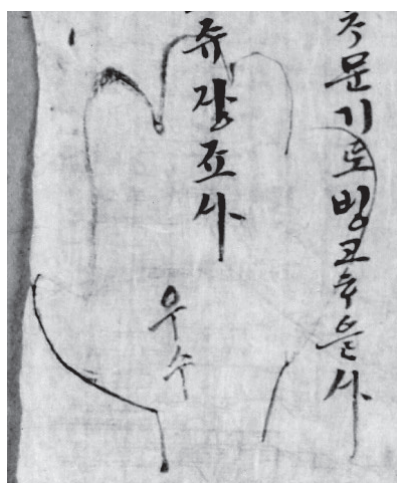


④金保寧宅(1873)

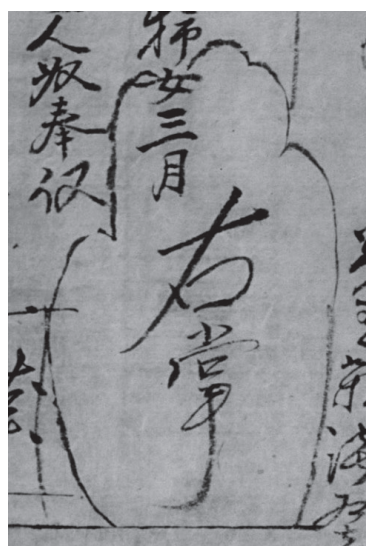


②婢元非(1607)

図 18 賤民女性の手寸



③張召史(1897)

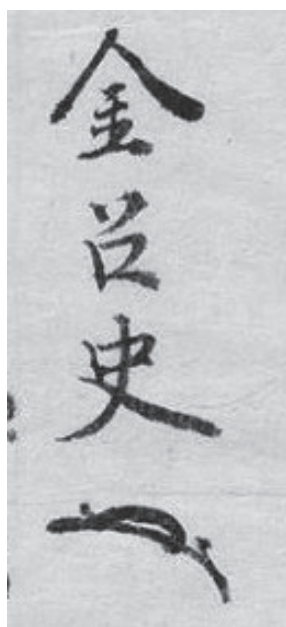


②三月(1730)



①私婢有之(1676)

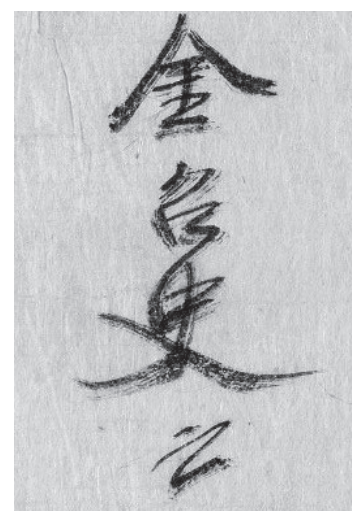
図 19 賤民女性の手掌



③金召史(1901)



②張召史(1850)



①金召史(1812)

図 20 平民女性の署名

右掌を描いている。特に朝鮮末期の手掌は、手の模様を図式化して描いたことがわかる。

〈図20〉は、寡婦となった平民女性を意味する「召史」の署名事例である。署名をするためには、何よりも名の文字が必要である。当時の女性たちには、日常的に用いる姓名が無かったものと思われる。そのため女性の署名は、「一心決」のように図式化された形態の図案にならざるを得なかったようだ。〈図20-①③〉は、すべて「一心決」の形態的な特徴を示している。売買文書には花押を用いないため、当然ながら署名をせねばならないが、形態的には花押の特徴を示している。

5 おわりに

署名・花押・手寸・手掌・図書の使い分けは、身分や性別によるというよりも、読み書きの能力によって決定される。両班も手寸をすることができ、賤民も署名することができた。ただし作成された文書数などにより、頻度の差異はあったであろう。

国王は最高峰の地位にあったため、主に花押を使用した。だからといって国王が署名を全くしなかったわけではない。王室男性は一般的に署名と花押を、王室女性も朱印図書を用いた。両班男性は読み書きの能力があったため、特殊な事情がなければ署名と花押を用いた。両班女性も手寸や手掌よりも、黒印図書を好んだ。男性官員中には日本との外交文書である書契に、朱印図書を捺すこともあった。平賤民は手寸をもっとも多く用いた。読み書きのできない人々には、手寸はもっとも便利な信標方式であったろう。しかし平民と賤民であっても読み書きができれば、署名することができた。それは女性も同じであった。

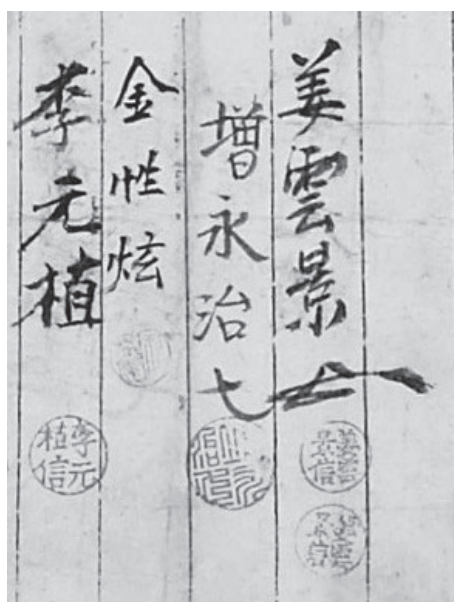
十五〜十六世紀のサイン様式が、形態的に全盛期であったとすれば、以後の十七〜十八世紀のサイン様式は、形態の緊張感が失われ抽象化された特徴を示している。サインがもっていた信標機能は、時期が降るに

つれて失われていったのである。十九世紀のサイン様式は、それぞれ見分けがつかないほどに図式化された。署名と花押は筆画の緊張感が消え失せ、手寸と手掌はまるで符合のように変化した。

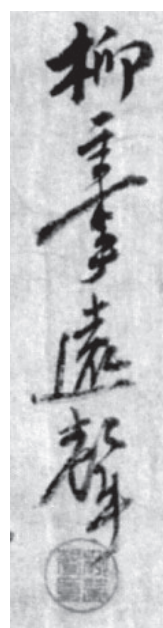
信標手段であるサインが、本来の役割を果たしていなかったのであれば、文書の権威と信頼も期待することはできない。特に契約文書の場合、状況はさらに深刻であったろう。このような末期的状況は、たちまちサインに変化をもたらす原動力となった。いずれにせよサインは変化せざるを得なかったが、このときに日本式の印章文化が流入した。姓名を刻んだ円形の朱印がそれである。

〈図21〉は、日本式の印章文化が流入する過渡期的特徴を示す事例である。〈図21-①〉は柳遠聲（一八五一—一九四五）という両班官僚の署名である。彼は名の文字である「遠聲」字で署名を作らず、当時流行していた「一心決」の形態で、図式化された署名を作った。〈図21-②〉は同じ柳遠聲の印章である。円形の朱印で、通常は姓名の三字を刻んだ後に、最後に「章」「印」「信」などの文字を足した四字で構成された。〈図21-③〉は印章と署名が混合している文書で、過渡期的な状況を反映している。署名はすべて「一心決」で、印章は姓名を刻んだ円形の朱印である。

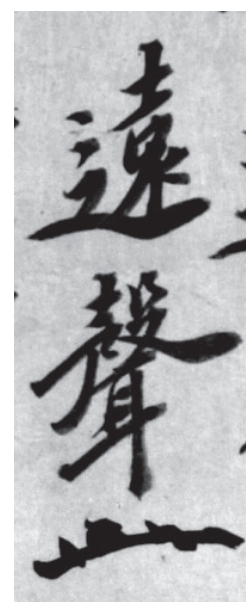
十九世紀に図式化されたサインは、すみやかに印章にとって代わられた。印章は身分や性別に拘わらず用いることができた。読み書きができなくとも、姓名を刻んだ印章さえあれば、いくらかでも使うことができたのである。したがって印章は、身分や性別、読み書きの能力など、すべての制約条件から解き放つことができるという長所をもっていた。ポールペンのような筆記具が一般化し、生活がデジタル化され、もはや印章も消えようという趨勢である。印章を持ち歩いてはいても、朱肉で捺すことさえ面倒な作業になってしまった。デジタル署名の時代となり、信標手段は特定の形態から暗証番号の数字へと変化している。



③印章と署名のある文書(1907)



②柳遠聲の印章(1905)



①柳遠聲の署名(1890)

図 21 署名と印章

註

- (1) 「御押用正字。(大臣、政府東西壁、六曹二品以上、館閣堂上會賓廳、同議以啓。)(『孝宗実録』卷一、一六四九年五月一日)／「大臣、政府堂上、六曹二品以上、齊會于賓廳、議御押、定以立字。)(『顯宗実録』卷一、一六五九年五月一日)／「許積等與政府堂上、六曹參判以上、館閣堂上、相議御押、守容宣三字備望以入、命以首望守字用之。)(『肅宗実録』卷一、一六七四年八月二十四日)。
- (2) 「上日、東宮之押以達字爲定者、取其通達之意、而雖行用文字、押則不必諱矣。(中略)以達字畫押於上、其下曰、予押即通字、乃受賜昔年者也。其欲勉飭、手寫付爾、用于將來、奚比臣工之製獻。又書左方曰、孔聖稱武王周公以達孝、曰善繼人之志、善述人之事、善繼善述、孝之大者。(下略)」「(『英祖実録』卷五七、一七四三年二月三〇日)。
- (3) 「子曰、武王周公、其達孝矣乎。夫孝者、善繼人之志、善述人之事者也。」「(『中庸』第一章)。
- (4) 明朝体様式は、天地に天平・地平の二本の横線を引き、その間を様々の線をもつて作るものである。(林讓、「花押覚書―研究の周辺―」、『歴史と地理』四四二、一九九二年、四九頁)
- (5) 「二品以上妻印方一寸七分、六品以上妻一寸四分、七品以下妻一寸。」「(『経国大典』礼典、用印)。
- (6) 「今訟時、傍音及所志内、所着名署以、各異事段、矣父亦矣身乙、初以濬哲文明之濬字以、名之爲白有如可、去戊辰年分、矣父亦稟于退溪先生、改之以宋朝名臣張浚之浚字爲白有昆。名署段、如依其名之字劃而署之乙仍于、前後名署不同爲白在果、(下略)」「(一五七八年李浚兄弟決訟立案、慶州玉山驪州李氏)。
- (7) 行列字は、世数關係を表すために一族で共通にする名前の字である。(例えば、兄弟の柳雲龍、柳成龍の龍字)
- (8) それ以外にも、芸術作品として書画に捺す落款印、書籍の所蔵印などの事例は様々にあるが、公私の文書に信標として捺すものとは見ることができないので、ここでは除外した。
- (9) 「婦人成置文記、則一從印信、印信則偽造者頗多、印信刻某鄉某氏、故同姓者、借用之、請刻某妻某氏。」「(『成宗実録』卷二三八、一四九〇年三月八日)。

【図版目録】

- 〈図1-1〉① 三功臣会盟文(一四〇四)、国立中央博物館所蔵。
 〈図1-1〉② 五台山上院寺重創勸善文(一四六四)、月精寺聖宝博物館所蔵。
 〈図1-1〉③ 書簡(一六三八)、国立中央博物館所蔵。

〈図1—4〉	書簡（十七世紀）、烏竹軒市立博物館所蔵。	〈図12—3〉	書契（二六一五）、国史編纂委員会所蔵。
〈図1—5〉	書簡（十七世紀）、烏竹軒市立博物館所蔵。	〈図13—1〉	明文（二五一九）、慶州良洞慶州孫氏宗家所蔵。
〈図1—6〉	書簡（十八世紀）、国立古宮博物館所蔵。	〈図13—2〉	明文（二六二三）、星州楡谷碧珍李氏宗家所蔵。
〈図1—7〉	『宝印符信総数』、ソウル大奎章閣影印本、一九九四所収。	〈図13—3〉	明文（二八九六）、星州楡谷碧珍李氏宗家所蔵。
〈図1—8〉	『宝印符信総数』、ソウル大奎章閣影印本、一九九四所収。	〈図14—1〉	明文（二七四五）、奎章閣韓国学研究所蔵（文書番号七七九三一一）。
〈図2—1〉	密札（十七世紀）、尤庵先生祀孫家所蔵。	〈図14—2〉	明文（二七二二）、奎章閣韓国学研究所蔵（文書番号一五七九四五）。
〈図2—2〉	御筆（十七世紀）、烏竹軒市立博物館所蔵。	〈図15—1〉	明文（二五四八）、慶州良洞慶州孫氏宗家所蔵。
〈図3—1〉	徽旨（十八世紀）、国立中央博物館所蔵。	〈図15—2〉	明文（二六七二）、海南蓮洞海南尹氏宗家所蔵。
〈図3—2〉	令旨（一七六一）、韓国学中央研究院蔵書閣所蔵。	〈図15—3〉	明文（二七一四）、羅州會津羅州林氏宗家所蔵。
〈図4—1〉	賜牌教旨（一四五七）、東国大図書館所蔵。	〈図15—4〉	明文（二八七七）、寧海仁良載寧李氏宗家所蔵。
〈図4—2〉	賜牌教旨（一四七〇）、国立中央博物館所蔵。	〈図16—1〉	招辞（二七一六）、奎章閣韓国学研究所蔵（文書番号一五〇三四五）。
〈図4—3〉	平咨（一六一二）、中国国家博物館所蔵。	〈図16—2〉	明文（二八九九）、奎章閣韓国学研究所蔵（文書番号八二四四一）。
〈図5—1〉	分財記（一四〇二）、国立中央博物館所蔵。	〈図17—1〉	明文（二七六三）、奎章閣韓国学研究所蔵（文書番号一九二三四〇）。
〈図5—2〉	古風（一七九二）、国立中央博物館所蔵。	〈図17—2〉	明文（二八〇九）、慶州伊助慶州崔氏宗家所蔵。
〈図5—3〉	伝令（一八〇二）、奎章閣韓国学研究所蔵。	〈図17—3〉	明文（二八七八）、慶州伊助慶州崔氏宗家所蔵。
〈図5—4〉	『宝印符信総数』、ソウル大奎章閣影印本、一九九四所収。	〈図18—1〉	分財記（一五五九）、奎章閣韓国学研究所蔵（文書番号六六五二三）。
〈図5—5〉	『宝印符信総数』、ソウル大奎章閣影印本、一九九四所収。	〈図18—2〉	明文（二六〇七）、慶州良洞慶州孫氏宗家所蔵。
〈図6—1〉	分財記（一四六八）、楊州思陵海州鄭氏宗家所蔵。	〈図18—3〉	明文（二七一六）、奎章閣韓国学研究所蔵（文書番号一四八五二二）。
〈図6—2〉	五台山寺院寺重創勸善文（二四六四）、月精寺聖宝博物館所蔵。	〈図18—4〉	明文（二八七三）、奎章閣韓国学研究所蔵（文書番号一六六四三七）。
〈図7—1〉	分財記（一五六六）、慶州玉山驪州李氏宗家所蔵。	〈図19—1〉	明文（二六七六）、海南蓮洞海南尹氏宗家所蔵。
〈図7—2〉	分財記（一五七九）、慶州玉山驪州李氏宗家所蔵。	〈図19—2〉	明文（二七三〇）、海南蓮洞海南尹氏宗家所蔵。
〈図8—1〉	五功臣会盟軸（一四五六）、個人所蔵。	〈図19—3〉	手標（二八九七）、夫餘恩山咸陽朴氏宗家所蔵。
〈図8—2〉	教牒（一五九五）、尚州愚山晋州鄭氏宗家所蔵。	〈図20—1〉	手標（二八一二）、奎章閣韓国学研究所蔵（文書番号一五六九五四）。
〈図8—3〉	分財記（一六七三）、個人所蔵。	〈図20—2〉	手標（二八五〇）、奎章閣韓国学研究所蔵（文書番号一三八三五〇）。
〈図8—4〉	教牒（一七八九）、尚州愚山晋州鄭氏宗家所蔵。	〈図20—3〉	明文（二九〇二）、奎章閣韓国学研究所蔵（文書番号二〇四四七九）。
〈図9—1〉	分財記（一四九二）、安東烏川光山金氏宗家所蔵。	〈図21—1〉	分財記（一八九〇）、安山釜谷晋州柳氏宗家所蔵。
〈図9—2〉	分財記（一五五九）、安東法興固城李氏宗家所蔵。	〈図21—2〉	明文（二九〇五）、安山釜谷晋州柳氏宗家所蔵。
〈図9—3〉	功臣世系单子（一七〇二）、安東法興固城李氏宗家所蔵。	〈図21—3〉	契約書（一九〇七）、国立ハンゲル博物館所蔵。
〈図9—4〉	立案（一八五三）、国立中央博物館所蔵。		
〈図10—1〉	分財記（一四三六—一四四三）、慶州良洞慶州孫氏宗家所蔵。		
〈図10—2〉	分財記（一五九四）、安東金溪義城金氏宗家所蔵。		
〈図11—1〉	明文（一五九五）、寧海仁良載寧李氏宗家所蔵。		
〈図11—2〉	明文（一六九九）、奎章閣韓国学研究所蔵（文書番号二二五八三三）。		
〈図11—3〉	明文（一六三三）、奎章閣韓国学研究所蔵（文書番号七〇七九八—八）。		
〈図12—1〉	五台山上院寺重創勸善文（二四六四）、月精寺聖宝博物館所蔵。		
〈図12—2〉	分財記（一六五六）、夫餘恩山咸陽朴氏宗家所蔵。		

（国立ハンゲル博物館、国立歴史民俗博物館共同研究員）
（二〇二〇年一月二七日受付、二〇二〇年七月九日審査終了）